

## <巻頭言>



### “交 流”

豊 田 高 司\*

古代文明が河川の周辺に発生して以来、人類は河川から恩恵を受けてきた。しかし、それは同時に「暴れる水との闘い」との始まりであった。以来、人類は「川の水をいかに制御し、利用するか」を考え、そのための技術を開発し、構造物を建設してきた。そのひとつが「ダム」であった。

ダムは、その後も時代に合わせて人々の要望に応じていった。農作物の生産に水が必要になればそれに応じたダムを造り、人々の喉を潤す水が必要となればそれに応じてダムが造られた。近代になって、人類は産業革命を起し工業生産を行うようになったが、水もまたそのために大量に使われるようになり、ダムが供給する水の役割がひとつ増えた。その後、人類は電気というエネルギーを手に入れたが、その最初の大量生産は水の持つ位置エネルギーを利用して行われ、ダムの持つ可能性がまた広がった。一方、暴れる水と闘い、人名・資産を洪水から守るためにもダムが建設された。

しかしながら、このような流れの中で、ダムはより大量の水を貯め、より落差の大きい水を保つことが求められるようになり、大型化していった。しかし、これにより、川のつながりが切断され、自然環境へ影響を与えることとなってきたことも否めない事実である。

このようなことに対処するため、ダムの建設および管理においても、ダム貯水池の水質を保全するとともに、ダム貯水池周辺および上下流の河川の生態系をできる限り保全することが行われるようになってきた。すなわち、我々ダムに関わる者は、ダムを造るときには「川の上下流のつながりを途中で断ち切ることなくダムを築く」、また、ダムを管理するときには「川の上下流のつながりを復活させていく」という視点を忘れてはならない。

水の上下流のつながりという点では、河川環境の大きな要素である豊かな水量と清澄な水質を確保するため、川の水を不特定容量として確保してきた。更に、発電取水口下流の減水区間に水流の復活を図るため、昭和63年度から発電事業者の協力により、水利権許可の更新時に河川維持流量を確保していただいている。

\* 建設省河川局長

土砂の上下流のつながりという点では、ダム貯水池の機能確保のために堆積する土砂をいかに排除するかといった課題から始まった堆砂対策が、最近では下流に土砂が供給されないことが要因のひとつと言われている河床低下や海岸侵食の防止という視点に替わりつつある。黒部川においては、出し平ダムとその下流の宇奈月ダムが堤体の下部に大型の排砂設備を設置し、洪水時に流水と土砂を同時に放流することにより、ダムがあっても河川の土砂を上流から下流に運べるシステムができあがりつつある。

生き物の上下流のつながりという点では、「魚ののぼりやすい川づくり推進モデル事業」として、平成4年4月に多摩川、揖斐川・長良川、太田川の3河川が、平成5年1月に吉野川、球磨川、七北田川、奄美5河川がモデル河川に指定された。そして、学識経験者等の参加をいただき実施計画を策定し、これに基づき魚類の遡上環境改善のため、計画的に魚道の設置、改善等の事業が実施されている。

これらの上下流のつながりに加え、もう一つ重要なつながりが人と人のつながりである。川を通じて伝えられる文化、川を通じて行われる人や物の交流。上流域からは川から受け取った恩恵をきれいなまま下流域へ受け渡し、下流域はそれに感謝の気持ちで応えていく。このためには、上下流の人々の交流というものが大変大きな意義を持つことになる。建設省では、ダム湖周辺の環境整備事業により人々が交流するための場を整備するとともに、地域の活性化にも貢献しているところである。また、地域に開かれたダムとしてダムを積極的に人々に開放し、人々が集い、交流する場として提供している。

川は水を流し、それによって生命を育み、人を育み、文化を育み伝えてきた。

これからのダムを建設するにあたって、水を貯え、その機能を発揮することは勿論として、自然に優しく、人々に親しまれ、多くの人々がそこに集い、そして交流の場となるダムづくりが望まれているのではないだろうか。